

ボランティアアせいそう

夏休みに入って間もない日曜日、地いきの「ボランティアアせいそう」※注の日がやってきました。今日は、駅前えきまえの公園こうえんを地いきのお年よりの方といっしょに自主的じしゆてきにそうじをする日です。ぼくとゆうじさんは、友だちのよし子さんにさそわれて、はじめて参加さんかすることになりました。でも、ぼくは、ほんとうはあまり気がすすみませんでした。家族かぞくのみんなが、「まさお、ぜひ行ってきなさい。」と何回も言うので、しぶしぶ出かけることにしたのです。

三人が、公園についたころには、もうすでに、十人くらいのお年よりの方が先に来ていて、自主的にゴミ拾いひろや草ぬきの作業さくを始めていました。なかには、何人かの小学生のすがたも見えました。まわりの様子ようすを見回して、よし子さんが、はりきつて言いました。

「花だんの中は草がいっぱい生えているわね。広いからたいへんね。さあ、わたしたちもがんばって、ぬきましよう。」

ぼくは、ごみ拾いがいいのと思いました。ゆうじさんがさんせいしたので、しかたなく、花だんのざっ草をぬき始めました。真夏まなつの太陽たいようがじりじりと照りつけ、体じゅうからあせが



ふき出してきました。ひたいのあせが流れ落ち、目にしみこむし、うでや足もひりひりしてきました。やっこのことで、ざっ草をぬき終えたぼくたちは、ぐったりとつかれて、木かげにこしを下ろして一息ついていました。

ちようど、そこへ、世話係のおじさんがやってきて、

「きみたち、悪いけど、公園のトイレそうじを手伝ってくれないかなあ。今、わたし一人でやってるんだけど……。」
と、声をかけられました。

「えっ、トイレそうじ？」（やったことないし、それに……。）
ぼくたち三人は、どうしようかとおたがいの顔を見合わせました。

世話係のおじさんは、ぼくたちのこまったような顔を見て、

「むりしなくていいんだよ。おじさんは、トイレそうじが楽しいから、進んでやっていただけだから……。トイレそうじで自分の心をみがく……。これはわたしがずっと続けていることなんだよ。こんなわたしでもだれかの役に立てると思うとうれしくてねえ。だから、毎回、ボランティアせいそうが楽しみなんだよ。つい、声をかけてしまったけど、きみたちは、つかれてるようだから、気にしないで休んでいなさい。」
と言って、トイレの方へもどっていきました。



おじさんの後ろすがたを見ながら、ぼくたちは、しばらくだまって考えこんでいました。

「おじさんには悪いけど、もう少し、休んでいようよ。

それに、トイレそうじは……。おじさんに

まかせておけばいいよ。」

と、ゆうじさんが口を開きました。

「でも、おじさん、一人でだいたいじょうぶかしら。

こまっているかもしれないわ。どうしよう。」

よし子さんが心配そうにつぶやきました。

ずっと、おじさんの言葉が気になっていたぼくは、

しばらく考えた後、

「ようし、もうひとがんばりだ。」

と自分に言い聞かせて、公園のトイレへ向かって一気に

かけ出しました。すると、ゆうじさんとよし子さんも後から、

追いかけるように走ってきたのです。

「おじさん、ぼくたちにもトイレそうじをやらせてください。」



ぼくたちは、おじさんのまねをして、ぼうたわしでトイレのべんきをゴシゴシとひっしでみがきました。ゆかをはいてホースで水洗いし、手洗い場の鏡もぴかぴかにしました。むちゅう

でやっているうちに、初めにもっていた、めんどろくさいなあ、いやだなあという気持ちは、消えていました。

「なんだか楽しくなってきたね。気持ちがいいね。」

「みんなでやれば、けっこう、できるものだね。」

と、そうじしながら、三人の会話がはずみました。

しあげに、よし子さんが、もらってきた花をトイレの鏡の前にかざりました。また一だんとトイレが明るくなったように思いました。

おじさんが、

「よくがんばったね。手伝ってくれてありがとう。これで、町のみんなが気持ちよくトイレを使うことができるよ。トイレそうじで心もみがけたね。」

と、笑顔で言ってくださいました。

三人は、きれいになったトイレをながめて、にっこりと大きくうなずきました。トイレの鏡には自分たちの心がうつし出されているような気がしました。



※ボランティアせいそう
町を美しくするほうし活動
(場所によってよび方や活動内ようがことなる)